

「女医」の社会学的想像力

——1930年代前後における「女医」の啓蒙言説を事例として——

筑波大学大学院 目黒 茜

1 目的

この報告の目的は、1930年代を中心に衛生展覧会や女性雑誌上で繰り広げられた「女医」の啓蒙言説を事例に、彼女たちの社会学的想像力 (Mills, 1959) という視座から、当時の「女医」の果たし役割を検討することである。これまでの「女医」に関する先行研究 (山本 1995 や渡邊 2014) から、日本の近代医学制度の誕生、発展期において、女性医師たちは「女医」として医学世界と社会における位置づけを獲得していったことが明らかとなっている。「女医」は、男性医師と対となる女性医師としてではなく、女性の感情や社会的な特性をいかした「女医」としてアイデンティティを形成した。そこで特徴的だったのが、妻や母として「家庭との親和性」に意義を見出していったことであつた。本報告では「家庭との親和性」に対して「女医」の社会学的想像力という視座からアプローチを試みるものである。

2 方法

データとして、1930年代を中心に、日本赤十字社による衛生展覧会や、『婦人倶楽部』における「女医」の啓蒙言説をとりあげた。収集されたデータのなかでもとくに多かった婦人病や性問題をめぐる言説を中心に、分析を行った。

3 結果

分析の結果、「女医」たちは、母や妻など女性としての経験や立場を戦略的に用いながら啓蒙活動を行っていたことが分かった。衛生展覧会などの公的な場では、婦人の体力向上や健康増進を説き、生殖の現場における女性身体強化に努めた。一方で、性問題をはじめとする私的な身体の問題は、女性雑誌をはじめとするメディアを介して、啓蒙活動を行っていた。女性雑誌上での婦人病や性問題をめぐる性的知識や衛生知識の普及においては、具体的なライフイベントやストーリーを交えることによって、読者にも分かりやすいように伝えられる工夫がされていた。戦前の日本において家庭の女性の性問題は、私的な領域で扱うことしかできず、女性雑誌は女性たちの「秘密」の情報共有の場となっていたといえる。

4 結論

「女医たち」は、妻や母といった女性という私的な経験を社会学的想像力の背景にもち、「国家を背負う医師」と、「女性に寄り添う医師」という異なる水準から、啓蒙活動を行っていた。

文献

山本起世子, 1995, 「近代「女医」をめぐる言説戦略」『園田学園女子大学論文集』30(I): 169-95.
渡邊洋子, 2014, 『近代日本の女性専門職教育—生涯教育から見た東京女子医科大学創立者・吉岡彌生』明石書店。

Mills, C. Wright, 1959, *The Sociological Imagination*, Oxford: Oxford University Press.